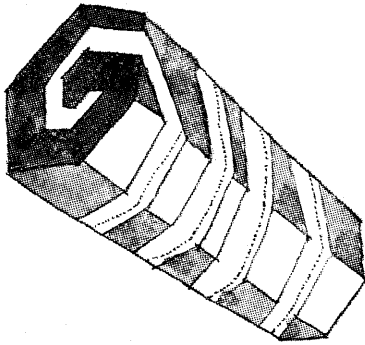


若いお母さんたちへ

引越という名のハードル



はるにれの会

入江礼子

この春、我が家は新学期を前にして、千葉市原の地から、東京は渋谷区代々木に引越をしました。市原には九十年おりました。一つ土地で十年間住めば、自ずと人間関係も親密になり、ましてや三人の子どもを育てながらの十年間でしたから、この社宅団地では、良きにつけ、悪きにつけ、最後の方は、主ぬしに近い存在になっていました。前回「ゆだねつつ育てること」というのを書かせて頂いたのも、そんな背景があつてのことでした。子育ては、つくづく自分一人で抱えきれものではない、むしろ隣近所に代表される回りの人々に助けられてしていくものだと確信に近いものを持つに到った矢先のこの一家大移動だったのです。

代々木の地は夫の実家。七十を越えた姑と同居ということになりました。

こうした全く私的都合での引越ですから、夫の勤務先は元のまま。つまり千葉のままです。工場ゆえ始まるのが早く、おまけに駅から工場まで徒歩三十分、どう早くても代々木からでは二時間三十分かかってしまいます。そんなわけで夫は単身赴任寮に残しての引越と相成りました。単身赴任とは言っても金曜の夜から月曜の朝まで一緒に過ごせるわけです、週日も一度は出張のため東京するので、遠隔地での単身赴任を余儀なくされている方から比べれば、随分と柔なものといえます。

というわけで、私としては回りの様々な心配をよそに、結構気楽に引越してきたつもりでありました。唯一気懸りなことといえば、子ども達の友達の問題といえましょうか。三人の子達は、それぞれ市原では気の合った友達もいて、かなり自由に思いきり遊んで暮らしていました。A(小三)は、クラスにも近所にも本人自身が親友だと呼んでいる友達がいました。引越間際から引越後一ヶ月くらいは、彼女達のことをしょっちゅう思い出し、今何をしているかしらと言いつづけておりました。

そうしながらも、こちらの地でも友達を作りたいという気持ちには人一倍あり、その姿勢も非常に積極的でした。

近所の子も達と登校するのですが、一日目にはRちゃんが話かけてくれたとか、又、学校でもFさんが話かけてくれて嬉しかったとか、毎日そんな報告をしていました。聞く度に、その拡がりが手に取るように分かり着実に地を固めていっているので、かなり安心しました。このAは、幼稚園入園当初、先生の手を一週間も握っていたという経緯があり、私にはその記憶が鮮明に残っているため、ついついそういう目でAを見がちになります。けれども現実には、その幼稚園の先生が、手を握り続けてしっかり受けとめて下さったお陰で、彼女の中には、人間、信頼するに足るといふ信念のようなものが芽生え、多分、早くお友達が出来ればよいなという不安と同時に、絶対出来るに違いないという確信も心のどこかに育っていったと思うのです。牛の歩みのようにゆっくりではありますが、友達との小さな関係も、嬉しさとしてしっかり受け止め、それが自信となって次の日に繋って

いつているように思えました。そういう経過をたどり夏休みを目前にした時点では、Oさんというピツタリ気の合ったお友達のほか、数人の仲良しが出来、男の子とは、ぶちあいのケンカをし、仄かに想いをよせるS君の運動会の写真が、今迄机を飾っていた社宅の時の友達の写真と入れかわって飾られるようになったのです。彼女なりに努力してこの一学期を越えていった感じです。私としては、彼女の姿勢が前向きだったので随分救われましたし、見守るだけであとは全部A自身が切り開いてゆきました。

そしてT(小一)。この春、地元の小学校に入学しました。当然お友達といえる子は一人もいなかったわけですが、入学後間もなく学校の隣りにある通称キシヤポッポ公園という所でT君やK君と約束してきたといつては出掛けていきました。春休みの間は、遊びながら、「あーあ、ここにH君やU君がいればいいのに」などと言っていたのですから、学校に入つてすぐこうして活動を開始したので、私たちはホッと胸を撫でおろしました。T

の特徴は、誰と遊んだのと聞いても、うまくそのお友達の名前を答えられないことにあります。「名より実」というのを地でいっている感があります。遊び場もキシヤポッポ公園に留まらず、そのままお友達の家へ流れていたりします。「お友達のうちへ行つたよ。」と言うので、名前をきいても「何だったっけ。忘れちゃった。」と言う始末。そのお宅へのお礼の電話が一月後なんていうのも珍しくありませんでした。東京へ来たなら、今迄のように靴がドロドロになることも、服がグシヤグシヤになることもなくなるんじゃないかと心配していたのですが、さすが、Tの場合、そんな親の懸念はあつという間にふっ飛び、靴はまっ黒(ドロではなく黒いのは空気のごれのせいでしょうか)、Tシヤツしかり、おまけに体に傷まで作つて遊んでいます。こんな都会に来て、千葉で培った遊び魂は、ちゃんと蘇みがえるんだなあと感じてしまいました。こちらに来て二ヶ月後の家庭訪問の折、先生に「生まれた時からここに住んでいるっていうような大きな顔をして、学校では過ごしていま

すよ。」と言われ、嬉しいやら、恥しいやら……。そう
です。TはAと比べるとむしろ家以外の場で発散してく
ることも多くそちらで感情をむき出しにすることがある
のです。私や姉や妹に囲まれ、Tは、ちょっぴり窮屈な
生活をいられているのかもしれないと反省させられて
しまいました。少し時が経つと、何が何でも外で遊ぶと
いうことはなくなり、自分で選択して家に居ることも出
来るようになりました。色々ありながら、引越が格別障
害になることもなく新一年生の生活を満喫しているよう
に見受けられます。給食はおいしいし（自校給食のせい
でしょうか）、友達はいるし、休み時間は、思い切り雲
梯をしているし、ケンカももちろんありますが、今のと
ころTは、学校たのしいという結論に達しているよう
です。

そんなわけで上の二人は、学校という、子どもの集団
に助けられて、あっという間に引越というハードルを越
えていってしまいました。

問題は、気楽に引越してきたつもりだった私と、三番

目のKだったのです。Kは六月に四才になりました。三
才の末に引越して来たことになりました。私とKが何故問
題になったか、次に考えてみることにしましょう。

Kは二才過ぎから、生まれてすぐからの親子で友人で
あるN子ちゃんの家、送って行きさえすれば、私がい
なくともよく遊べるようになりました。三才時代は、殆
んど毎日といっても過言ではないくらいお互いの家へ行
ったり来たりで、お使いの時など双子と間違えられるこ
とがある程よく一緒に過ごしていました。派手な喧嘩も
しょっちゅうですし、親のいる方が甘えてグズグズ言
うこともよくありました。けれども、KもN子ちゃんも、
お互いが一番ピタリした相手であることに変わりはな
く、本当に良く遊び込んで行きました。そのうちに、ご
く近所のS子ちゃん（二年年長）に遊んでもらったり一
才半年下のM子ちゃんのお宅にお邪魔したりとすこしず
つその輪を拡げ、ともかくKは慣れ親しんだ世界で、内
も外もなく自由にお友達と遊び暮らしていました。我が
家でじっくり一人で遊んでいるなどということは皆無に

近く、Kは精力的に外向きに動き回っていました。Kはこのように良く遊んでくれましたから、私も家にいる限りは、不思議と自分自身の時間を持つことが出来、二人でベツタリ過ごしたという記憶は、私にはあまりありませんでした。

そういう生活全てが、この引越で根こそぎ奪いとられてしまったのです。上の二人が、すぐにといいてよいほど早く周囲に馴染んで自分らしく振舞えれば振舞えるほど、私とKの落ちこぼれぶりは見事という他ありませんでした。

朝八時、上の二人が登校すると、Kと二人きりの生活がはじまります。(姑と同居なのですが、玄関だけが一緒で、あとは独立した暮らしをしています) 最初の項、まだ引越したということが実感として捉えられていなかったKは、今迄通り、朝からM子ちゃんやN子ちゃんの家に行きたいと決って言い出します。それが叶わないとなると何となくグズグズし、一人遊びに慣れないKは、自分を持って余している感じでした。そういうKをみて、

私自身も何となく落ち着かず、お友達がいらないからこうなるのだとばかり、公園に連れて行ったり、近くの渋谷区のスポーツセンターの幼児体育室に遊びに行ったり、代々木公園の幼児車乗り場に行ったりと二人で放浪の旅を続けました。けれど予想以上にKと同年令の子の姿を見つけることはむずかしく、場所を変えてもKと私という二人だけの構図は、ちっとも変わりませんでした。何故子ども達がいらないのか? いくら都会といっても、もう少し子どもはいるはずではないのだろうか?

結局一ヶ月余りも経って思ったことは、まず私たちの行動開始時刻が、Kと同年令を第一子に持っている家庭に比べて、ずっと早いのではないかということでした。私たちは九時にはあちこち歩いています。そしてお昼前に引き揚げるのですが、どうやらその引き揚げるころになつてボチボチ子ども達が出て来るのです。それでも今年四才になる子はほとんどいませんでした。もう少し年令が低いのです。もう少し時間をずらそうかとも考えましたが、上のTが新一年生でもあり、四月中は帰宅時間が

早いため、それもままなりませんでした。今迄の社宅近くの公園と違って、ここでは、誰かが遊んでいるから、その姿を見て、子どもが出て来るなどということは考えられないことなのです。親が連れてこなければ出掛けられませんから、たとえ早くから外に遊びに出たいという欲求が子どもの側にあっても、それは叶わないことになります。

いくら早く出ても子ども達に会えないので、私たちは無理してまでも外出することをやめ、朝ゆっくりと家で過ごしてみました。最初のうち自分を持って余し気味だったKも、私が片付けやら掃除やらをしている傍らで、絵などを描くようになりました。気がついたら「頭足人」という感じでした。つまりメチャクチャ描きやなぐり描きをする時期、Kはお友達と遊ぶことに忙しくゆっくりそういうものを描いたことはなかったのです。今、堰をきったように家族の一人一人を何枚も何枚も描きました。こういうことをKがしはじめたあたりから、私も少しだけ、お友達が今はいなくても、Kの中では伸びて

いくものがあるかもしれないと思いはじめました。そう思つて覚悟を決めると不思議なもので、絵を描くだけでなく、リカちゃんやぬいぐるみを出して一人でおままごとをしたりすることが目立ちはじめてきたのです。Kがお友達と一緒に屈託なく声をあげて笑う姿が見られないのは、とても寂しい気がしましたが、ひとまずは、成り行きにまかせてみようと思いました。

Kは三番目の子どもです。三番目ともなると、親の方も良きにつけ悪しきにつけ慣れた育児となり、色々なこだわりがなくなるかわり、かなり無意識に日々を過ごしていきがちです。Kは、ケンカはあつてもお友達と良く遊んでいましたから、何か良くは分からないけれども順調にいっているようだからの大雑把な据え方しか出来ないでいました。そして、それでよいと思つている部分も多々ありました。しかし、この引越によつて、彼女が友達から引き離されてはじめて、私は、私がKを育てているのだという意識を持たされたといつても過言ではありません。もちろんオムツがとれるくらいまでは、当然

そういう意識を濃厚に持つてはいましたが、KがKなり
の友達との世界を持つようになってからというものの、心
理的にはかなり手放した状態でいました。一番上の子を
育てるのと違い、三番目ともなると、家の中でも兄弟同
志で育ち合っていく部分も多く、母親である私は、外側
から見守るのが大きな役目で、直接手を下して何かする
ことは、非常に少なくなっていたのです。そういう折も
折、こうして二人でむかいあう状態を余儀なくされた私
は、K共々非常に戸惑いを感じました。むしろ私の方が
早くKにお友達を欲しいと思っていたのだと言っても過
言ではありません。お友達がみつければとりあえず、こ
の二人ベッタリの状態からは解放される。解放されれば
何とかなるといったような短絡的思考が働いていたよう
に思います。

あちこち探してもお友達が見つからず、いよいよ最後
の手段ということで近所の幼稚園をKと一緒に見学して
きました。そこで見たものは……。確かに子どもたちは賑
やかに元気でした。Kと同年の子も何人もいました。

けれどもたまたま、年少組（四才児）の若い先生が、
「今度先生の言うことをきけなかったらお外へ出します
よ！」とこわい顔で叱っているのを見てしまったので
す。私は、ここではじめて我に返りました。今の先生の
対応は、子どもに対する母親の強圧的な態度と何らかわ
るものではないと思っただけです。叱っていた細かい内容
は省略しますが、ともかく私には大したことないと思え
るようなことで叱っていました。ここにきてはじめて、
私はKとベッタリいることを重荷と自分が感じていたこ
とを悟り、それから逃れんがために幼稚園に預けようと
していることに気付きました。確かにKもお友達を欲し
ていました。けれどもKはKなりに、お友達がいないと
いうことを事実として受けとめ、自分なりに、一人の時
を自らの充実の時として歩みはじめていたのです。私は
そこにはあまり気付かず、お友達さえいればKも私も何
とかなるという幻想に振り回されていたといつてよいで
しょう。市原の地で回りの方々に助けられて、自分の時
間というものを手に入れてしまった私は、無意識のうち

にそれにしがみついてしまっていたのです。Kのためと思つてあれこれ動いていたのが実は自分のためでもあつたということは、本当にショックでありました。

幼稚園には、今は入れまいと思ひ、ともかく今は、Kと二人で居よう、そう思つて改めてKのことをみてみると、姉兄達より、台所まわりのことは良く知つていますし、傍らでお米をといでくれたり、お皿洗いをやつてくれたりします。「お母ちゃまはいいね。毎日こんな楽しいことしてるんだもんね。」と言いなから楽しそうに食器洗いをしているK。本をひっぱり出してきて暗誦しているK。姉が学校にいつの間、絶対つかわせてはもらえないものをそつと使つて密やかに楽しんでゐるK。よく見れば、もう退屈しているKではなくなつてゐるのです。その萌芽に気付かず、ひたすら友達をみつめることで事を解決しようとしていた自分が恥しくなりました。

月に一度、市原でしている「千葉はるにれの会」の親子の集まりでは、水を得た魚のように、従来以上に元氣

に友達と遊びまわつてゐるKを見て、今現在、お友達が目の前にいないということは事実ではあつても、Kの一人である時間が豊かになれば、Kの成長にとつてプラスにこそなれ、マイナスにはならないのだと改めて思つたのでした。

Kにとつて引越というハードルは高く越え難く思われましたが、越えるための一歩はしっかり踏み出したようです。そして私も遅ればせながら、ゆっくりとこのハードルを越えていきたいと思つたのです。と同時に、今度、二人でいることから逃れるための友達探しではなく、この場、この地域に根づく友達探しを細々とでも続けてゆけたらと思つてゐます。